

大学生の学習方法と学習習慣の検討（2） —学習観との関連の検討—

小川 亮（富山大学）

キーワード：学習方略，学習習慣，学習観

小川（2016a）は，高等学校1年生から3年生の410名を対象に，学習方法48項目，学習習慣36項目の調査用紙を実施した結果を報告している。因子分析の結果，学習方法では12因子が，学習習慣では5因子が抽出された。学年とクラスタ分析の結果の関連を検討した結果，学習方法では学年と共に望ましくないクラスターの人数が増加していた。学習習慣では学年差は有意でなかった。

小川（2016b）は，高校教師の重視する学習方法・習慣のデータを分析し，高校生の重視する学習方法・習慣と教師の重視する項目との関係を検討した。教師と学習者では重視している項目には差が認められた。生徒による評価が教師を上回っていた項目は「勉強の合間に楽しいこと（読書，スポーツ，テレビなど）をする」など動機づけを保持する内容が多かった。

小川（2017）では，小川（2016a,b）で利用した調査用紙を大学生157名に実施した。大学生が多く使う学習方略を検討した結果，大学生も高校生と同じような方略を用いていることが示された。

本研究では，小川（2017）の結果ならびに学習観に関する先行研究（植木，2002；植阪・瀬尾・市川伸，2006など）を参考に，大学生の用いる学習方法・学習習慣と，大学生の持っている学習観の関連を検討することを目的とした。

方 法

調査時期 2017年7月

調査対象 A県内のB大学の学生152名（男63名，女89名）。平均年齢は男性が19.08歳（SD=0.75），女性が18.92歳（SD=0.51）であった。

調査内容

- ・学習方法調査（18項目）：「どう勉強するとうまくいくか」について5段階で評価。
- ・学習習慣調査（23項目）：「どのように勉強しているか」について5段階で評価。

・学習観調査（30項目）：「学習はどうあるべきか」について5段階で評価。

手続き

2つの質問紙調査は，教育心理学の講義時間を用いて実施した。教示として，この調査が普段の勉強の方法や習慣に関するものであり，成績には一切反映されないこと，データは統計的に処理され，個人が特定されたり，個人の情報が外に漏れたりする心配の無いこと，回答はいつでも中断できることなどを伝えた。

結 果

共通性をSMC推定し，最尤法+PROMAX回転で分析した結果，学習方法調査では5因子，学習習慣調査では5因子，学習観調査では7因子の因子を得た。これら12の因子を2次因子分析を行い4つの高次因子を得た。この2次因子分析結果を参考に17因子の関係をパス解析した結果，Figure 1のようなモデルを得た。しかし適合度は十分でない（GFI=0.76，AGFI=0.65，RMSEA=0.15，AIC=394.9）ので今後，モデルの再検討を行う。

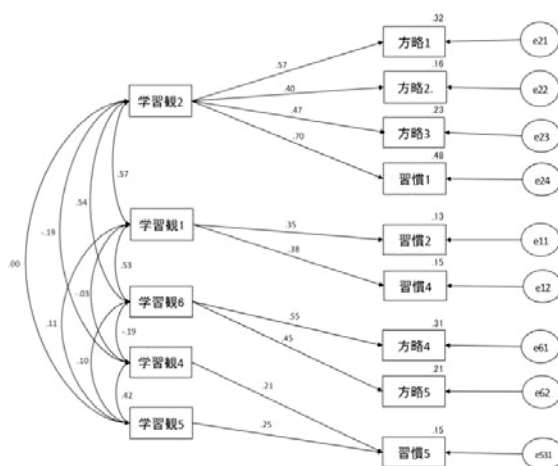


Figure 1 17の因子間のパス解析の結果